

甘さを頬張り

Ananam!
DISSOLVA

そしてトケコム。

竹の節目に 篠の目に出づる光に

Welcome To

とけこんだ 僕たちの 12 日間。

Our Paradise.





DISSOLVA ボルネオプロジェクト
於 マレーシア・サバ州・ブアイヤン村



- 02 Our 12 days in Borneo
ボルネオ 12 日間の旅
- 10 8 Projects in Sabah Malaysia
現地での 8 つのプロジェクト
- 28 From the start to the fete at Gakushuin
DISSOLVA 学内活動
- 38 DISSOLVA members' notes
メンバー紹介
- 66 Acknowledgement
謝辞
- 96 DISSOLVA research reports
研究報告論文集

(右)
マレーシア
(ボルネオ島)
サバ州の地図

(左)
クロッカー山脈
国立公園の地図



12
日間
の旅



Diverse and
多様で
Sustainable
持続可能な
Solution-
seeking
解決策さがす
Voluntary
ボランティア
Action
活動

START

DAY 1
2024.09.11

09.11 成田空港出発



Kg. Kuai
DAY 2-3
2024.09.12-13

09.11 コタキナバル空港到着
12 高等師範訪問・現地生活物資購入
13 クアイ村でタパイづくり・竹床づくり



TREKKING

2024.09.14 DAY 4



Kg. Buayan

DAY 5
2024.09.15

09.14 ブアイヤン村到着 (徒歩5時間)
15 竹取り・竹移植・発酵食づくり



DAY 6
2024.09.16

09.16 ファミリーデー・スポーツ大会
ゴング・スマザオダンス

Kg. Buayan

DAY 7-10
2024.09.17-20

09.17 竹あかり・竹パネルづくり
18 竹パネル・竹あかりづくり
19 3Dモデリング・トンクゴンづくり
20 狩漁採集体験・フェアウェルパーティー



TREKKING

DAY 11 2024.09.21

Kota Kinabalu
DAY 12
2024.09.22

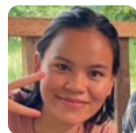
09.22 コタキナバル空港出発
～クラルンプール経由



GOAL
DAY 13
2024.09.23

09.23 成田空港到着





ジェイソン Jayson John
バンパーパネル指導をしてくれたジョウイットさんの息子さん。友達のアランくんは手工芸の名人になりたいけれど、自分はエンジニアになりたいと、機械工専門学校で勉強中。

アラン Alan Tambayang
DISSO LVA活動の総括責任者であるイメルダさんの弟で、10人兄弟姉妹の下から2番目。16歳。ドンゴンコンにあるDatu Peter Mojuntin中学校のスポーツ選抜の生徒です。今回はバンパーパネル作りで活躍しました。

テリシア Theresia John
パトリシアやアロイシアの姉で、2012年以前からNGOの受け入れ等を中心的に担ってきました。今回、キッチン担当で、もう一人の妹のクラリサとともに、ティノブンやドーナツなどお菓子を作ってくれました。

ジェシカ Jessica Mansani
コジェックのお姉さんで、普段はタンパルリで伝統音楽奏者をしている25歳。私たちのためにブアイヤン村に戻って、いつも大きな笑顔で朝昼晩の食事作りをしてくれました。

アロイシア Aloysia John
ブアイヤン村一番のビジネスウーマンで、今回の村での受け入れの中心。昨年、長く交際していた旦那様と結婚し、出稼ぎ中の彼とは引き続き遠距離だけれど、姉妹で高婚のご両親を助けるため、田を耕し地域に貢献しています。

パトリシア Patricia John
ブアイヤン村の中心的な役割を担う若手の重鎮。村では教会の代表や小学校のガーデニング仕事をして、今回もセンス良く見た目に美しい料理を作ったりしてくれました。

アニタ Anita Muzin
隣村のティク村出身の26歳。普段はマレーシアの首都クアラルンプールで、ランドスケープ事業の仕事をしており、休暇中にサブリーナとともに活動に参加してくれました。

サブリーナ Sabrina Sukor
ペラ州の師範大学に入学したばかりの21歳。英語も得意で、今回は学生対応の役割を担いつつ、大学入学試験をオンラインで受験するという凄技を発揮してくれました。2月の報告会には、対面で学習院にお招きする予定です。

コスマス Cosmas Sukor
妹のサブリーナと、久しぶりに活動に参加。2012年初年度から、とびきりの笑顔で元気に初対面の日本人学生たちと接してきました。今は、クアラルンプールの大学で警察治安維持のディプロマを取得すべく勉強しています。

コジェック Jacknikson Mansani
機械工専門学校を出て、小立公園やブアイヤン小学校で働いています。小さい頃、小学校のない隣村から来ました。今回は高等師範訪問やクアイ村との交流に参加しました。

ジブライアン Gibrilan Siparis
DISSO LVAホルネオプロジェクト開始時は、兄のレイモンドやネリウスについて来る中学生でしたが、高校時代はやり投げの選手としてマレーシアの国体に出るほどでした。普段は沖合の石油掘削エンジニアとして働いています。

ブアイヤン村若者委員会 TOMUYA



09.16 ファミリーデーには、町に引っ越した村出身の家族が皆戻ってきて、スポーツ大会をしました。どの家族チームが、一番早く稲を脱穀・精米して、きれいな白米に仕上げることができたでしょうか？



ジェローム Jerome Jamnis

同じく、ジェヘニアさんの息子さんと、16歳。小さい頃から、兄弟姉妹とても明るく、日本人学生たちとダンスを踊ったりして、盛り上げてくれました。



ケヴィン Kevin Jamnis

ブアイヤン小学校の先生をしているジェヘニアさんの息子さん。英語が得意な22歳。今は小学校の給食調理場で、毎日たくさんのお飯を作っています。



シリル Cyril Alexander

今回もホームステイでお世話になったお家のアレックスさんアンジェラさんのお夫妻の息子さん。28歳。今は、半島で仕事をしています。



ジョシユア Joshua Julius

アイリーンさんの息子で、以前はお兄さんのブルーノさんと一緒に活動に参加してくれました。今は、小型水流発電をサバ州の農山村に届ける活動をするNGOのトニブンで、エンジニアとして働いています。



ジャクソン Jackson John

サバ州立公園ブアイヤン村サプステーション管理事務所の役職を、お父さんのジョンさんから引き継いで、その管理や登山訪問客のガイドをしています。



マリウス Marius Umaat

若者を陰から見守る4児のお父さん。ブアイヤン村開発委員長として、様々な問題解決に取り組んできました。真面目で村人からの信頼は厚く、時には冗談を交えながら皆を楽しませてくれます。



ジョウイット Joviti Sabandok

村一番指先が器用で頭がいい、手工芸の名人。今回も、生物文化遺産の家の壁にするために、パンブーパーネルの作り方の指導をしてくださいました。



イデイス Edith Limpangon

若者たちを見守りつつ、陰でしっかりサポートしてくれる、サブリナさんのお母さん。普段は小学校のお掃除の仕事をしています。脱穀ゲームで大活躍。



アルバート Albert Lojma

以前から、DISSOLVA活動を支援してくれている村の重鎮。今回は、ランプーターやマンガスチン、ランサットなどたくさんのお菓子を提供してくれました。



アイリーン Irene Kodoyon

初年度から毎年お世話になっているお家。おもてなしには慣れており、広い家でも安心して生活することができました。お父さんとお母さんは教会のカテキスタとしてますます忙しく働いています。



ジョン John Sobiang

長らく村長を務め、村一番の良識と信頼を持ち合わせた長老。奥さんのヒルダさん、4人の娘たち、2人の息子たちとともに全面的に活動をご支援くださいました。2016年には報告会出席のため来日。

ブアイヤン村の大人たち&若者たち



高等師範

オルガの学校

■ブアイヤン村から外の世界へ

2024年2月、サバ州北部トゥランにある高等師範学校ケントキャンパス (Institute of Teacher Education Kent Campus) の学生さんたちとZoomを通してオンラインで交流したのに続き、今回の渡航では実際に現地を訪れ、直接交流を行う機会を得ました。この訪問は私たちにとって非常に意義深いものであり、多くの学びと感動を得る貴重な体験となりました。現地に到着した際、ケントキャンパスの皆さんが私たちDISSOLVAメンバーを非常に温かく、そして盛大に歓迎してください、その規模と熱意に圧倒されました。歓迎の際に、現地の学生さんたちは美しい民族衣装を身にまとい、そのデザインは色鮮やかで細部まで丁寧に仕上げられていて、伝統文化の繊細さと美しさを実感しました。民族衣装そのものが、彼らの文化的誇りを象徴しているように感じられ、私たちに新鮮でした。現地での滞在中、ケントキャンパスの学生さんたちから学校内を案内していただきました。彼らの日常的な活動や学びの内容を詳しく教えてもらう中で、文系理系といった学問の枠組みにとらわれない多様な取り組みを目の当たりにしました。校内を案内していただく中で、学生さん一人ひとりが明るく自信に満ちた表情で説明してくれる様子がとても印象的で、その積極性や活気のある校風が心に残りました。また、現地の学生さんたちが私たちとの交流のためにたくさんのアクティビティを準備してくださいました。その中でも特に印象的だったのが、現地の伝統舞踊スマザウ(Sumazu)の体験です。このダンスは彼らの民族文化を象徴するものです。

■他民族社会の学校教育

現地の学生さんたちは踊りを披露してくださいただだけでなく、私たちにも丁寧に踊り方を指導して、一緒に踊りました。この体験を通じて、ダンスや音楽を持つ「言葉を超える力」を実感し、異文化理解の深まりを感じました。さらに、現地の学生さんたちによる伝統的な歌の披露や踊りのパフォーマンスも非常に感動的でした。文化や習慣が異なるからこそ、共有できる喜びや感動があることを感じました。今回の交流を通して、DISSOLVAメンバーそれぞれが日本と現地の学校や学生の雰囲気の違い、熱気の違いを肌で感じ、教育の在り方について新しい視点を得ることができたと思います。こうした交流を通じて、日本国内ではなかなか得られない気づきや学びが多くあったように感じています。また、この交流を実現するために多くのサポートをしてくださった現地の方々、特にDISSOLVAボルネオプロジェクトに参加して下さっているオルガさんには心から感謝の気持ちを伝えたいと思います。オルガさんは、学校訪問に向けた事前準備や現地でのトレーニングのサポート、さらには事後活動としての動画撮影など、さまざまな場面で積極的に行動してくださいました。そのサポートがあったからこそ、今回の交流を円滑に進めることができ、より深い体験を得ることができました。このような正式な場で現地の方々と交流できたこと、そして日本ではなかなか経験できない文化や教育環境に触れることができたことに、心から感謝したいと思います。この体験を今後の活動や学びに活かし、さらに深い異文化交流の実現を目指していきたいと強く感じています。

Q. WHAT DID YOU DO IN KENT CAMPAS?




ブアイヤン村 12日間の旅





DISSOLVA

8つのプロジェクト




 プロジェクト① 村伝統の発酵食と飲み物づくり
Fermented Food and Drinks Project p.12-13


 プロジェクト② 竹あみバンブーパネルづくり
Bamboo Panel Weaving Project p.14-15


 プロジェクト③ 竹あかりバンブーランタンづくり
Bamboo Lantern Drilling Project p.16-17

 プロジェクト④ 竹楽器トングゴンづくり・ゴング演奏
Bamboo Tongkugong Project p.18-19

 プロジェクト⑤ 三次元モデリング聞き取り調査
3D Modelling Interview Project p.20-21

 プロジェクト⑥ 耕作地の水利権に関する聞き取り調査
Water Rights Interview Project p.22-23

 プロジェクト⑦ 高速道路建設に関する聞き取り調査
Pan-Borneo Highway Interview Project p.24-25

 プロジェクト⑧ フタバガキ樹林観察トレッキング
Dipterocarp Forest Trekking p.26-27

伝統の発酵食と飲料

日本の発酵食品は味噌、醤油、酢、みりなど調味料やぬか漬けなどの漬物、納豆など種類が豊富です。日本は温暖で温度の高い気候風土を生かしながらカビの一種である麹菌を用いた発酵食品を多く生み出してきたことで「発酵大国」と呼ばれています。渡航したボルネオ島ではタパイという伝統的な発酵飲料があり、今回のプロジェクトではこのタパイを作ることで日本の発酵食品と比べながら異国の食文化への理解と関心を高めることを目指しました。タパイは甘酒のようなもので、お米を炊いてから麹菌サドを散布し、よく混ぜて1週間発酵させます。数日で完了するプロジェクトではないため、村に着いた初日に発酵プロジェクトに取り組み、最終日のパーティーの日に乾杯することになりました。村ではそれぞれメンバー分のプラスチックコップを用意し、お米と麹を混ぜて混ぜて作りました。米や麹の量は大体決まっていますが、手作業で行うため最終的には個人の匙加減です。日本では発酵食品を自らの手で作るというのは経験したことがなく、大抵完成品をスーパーで買って家で食すのみですが、手作業で作ることによって

非常に新鮮な体験でした。最終日、村の倉庫に保管されていたタパイの入ったカップを覗いてみると、微小な炭酸のような空気がプクプクと泡立っていました。これは酵母が糖分をアルコールと炭酸ガスに分解してエネルギーを生み出す際に二酸化炭素を生成するため発生します。パーティーで乾杯した後、カップに太いストローを指し、底に溜まっている液体を吸ってみると爽やかでありながらも甘みを残した飲みやすいお酒が味わえました。しかし、これは私がお酒を作る際に少々怖気付いて麹の量を少なめに入れたからであり、他のメンバーのタパイを味見するとねっとりとした舌触りにお酒の匂いがツーンと鼻を突き抜けるようで、全く違う種類のお酒かと思うほどでした。発酵プロジェクトに限らず、村の生活では自らの手で食べ物や飲み物を作る経験がありました。日本では当たり前のように売っているものが村にはありません。食材を自らの手で取り、作り、その過程を経て初めて飲食することができます。日本では言葉だけになっていた「いただきます」が、村では熱のこもったものに変わっていたのが手に取るようにわかりました。

菌のチカラ



竹で編んだ壁パネル

竹細工の技術は、アジア各地に先住民としての文化を残してきた山の民が伝承してきた伝統的な技です。日本でも、六つ目編みや、網代編みを使った、伝統的な竹細工は昔から生活の中に取り込まれてきました。今回私たちが挑戦したのは、日本でいう四つ目編みと六つ目編みの中間の「十文字四つ目編み」と呼ぶことができるような、ボルネオ島独特の編み方です。DISSOLVA 2013の際に、英国エジンバラ大学建築学科の学生とコラボして建てた「生物文化遺産の家（通称ビオブダヤ）」として知られるコミュニティ施設には、もともと竹編みで作られた壁パネルが設置されていました。この壁パネルには、網代編みに似ている、目の詰まったデザインが使用されていました。しかし、2023年にDISSOLVAの支援のもとでバンブーデッキを増設したところ、その壁パネルの下部に隙間が生じ、そこから犬が侵入する状況（ファイヤン村の犬は放し飼い）が発生していました。この問題を解決するため、壁パネルの拡張を行うプロジェクトを実施することになりました。

竹編みはデザインによって難易度も異なります。現地の方々や相談し、初心者でも取り組みやすく、現地の気候に合うような「十文字四つ目編み」のデザインを選びました。制作工程としては、まず竹籤（竹を細く加工したもの）を作成し、それを用いて竹を編んでいきます。その後、完成した竹編みをバランという現地の鉋を使って目的のサイズにカットします。そして

最後に、ニスで防虫加工を行い、補強作業をして仕上げになります。このプロジェクトを通じて、現地では竹編みができる方が減少している現状や、伝統文化が衰退している現実にも直面しました。伝統文化を守り継承することの難しさは、日本に限らず世界中で共通する課題だと感じました。しかし、希望を感じた場面もありました。それは、竹編みに興味を持ってくれた村の中学生さんが、初めての体験にも関わらず非常に上手に竹を編んでいたことです。その技術の高さに驚かされると同時に、次世代が伝統文化に興味を持つきっかけを提供できたことを嬉しく思いました。

現地の方々は、竹編みといった繊細な動きも丁寧にこなされていて、DISSOLVAメンバーとの手の動きの差に驚きました。また、このプロジェクトに参加したDISSOLVAのメンバーにとっても、竹編みは初めての体験で苦戦する部分もありました。しかし、村の方々からアドバイスを受けながら、一緒に作業を進める中で仕上がった時には大きな達成感を得ることができました。村の方々と交流しながら、伝統文化に触れる機会を得られたことに深く感謝しています。

このような活動を通じて、伝統文化の価値を再認識し、それを次の世代に引き継ぎつなげを作れたことは、非常に貴重な経験でした。これからも、このような竹を用いた手工芸の取り組みを続け、伝統文化を未来へと繋げていきたいと考えています。

風の通り道



民族の印を竹灯りで

9月17日と18日の二日間、竹パネルの制作と並行して、私たちは「竹あかり」制作にも取り組みました。竹あかりとは、竹にさまざまな形の穴を開け、その中に入ろうそくやLEDライトなどを入れて光を灯す作品です。竹の自然な風合いを活かしつつ、美しい光と影の模様を作り出すこの竹あかりは、日本の伝統文化の一つとして古くから親しまれています。このプロジェクトを実施するきっかけは、昨年のゼミ合宿での体験でした。その際、竹あかり制作者であるアカリノワ（株）大淵の大村さんに直接指導を受け、竹の可能性とその魅力を改めて感じる事ができました。今回は、その経験を活かし、村の静かな夜を彩る素敵な明かりを灯したいという思いから、竹あかり制作に挑戦しました。竹あかりの制作工程は以下のような流れで行いました。まず、適切な長さに竹を切り出します。この作業では竹の太さや形を考慮し、同じ大きさのものを選ぶことが重要です。その後、竹の油分を熱で浮かせて、その油分で磨くために、ガスバーナーで全体を炙ります。この工程を経ることで、竹特有の美しい色味と質感が引き出され、さらに竹の耐

久性も高まります。次に、竹にデザイン用の紙を貼り付け、穴を開けるための下準備を行います。このデザインは、竹あかりが生み出す光の模様を左右するため、ドゥスン文化のモチーフを使用しました。ドリルを使い、デザイン通りに丁寧に穴を開けていきます。完成した竹あかりは3本ずつ束ね、安定して立てられるよう設置しました。現地での点灯は、日が暮れるタイミングを見計らって行いました。暗くなり始めたころ、一斉に光を灯しました。

村の夜は東京などの都市部と異なり、人工的な明かりがほとんどなく、静かで暗い環境です。その中で、竹あかりが放つ柔らかく温かい光が夜空に浮かび上がり、幻想的な光景を作り出しました。

今回のプロジェクトは、現地の方々にも大変興味を持っていただきました。制作中から多くの方々がお手伝いに来てくださり、私たちにとても良い交流の機会となりました。また、完成した竹あかりを目にした現地の方々からは、「とても美しい」「村にぴったりの光景だ」といった温かい感想をいただき、大きな達成感を感じることができました。

漏れ出る光



竹と鉄の素朴な楽器

ボルネオ島には数多の楽器が存在します。ボルネオの先住民にとって楽器は単なる演奏の道具ではなく、古くから村の重要な儀式に用いられてきました。楽器そのものが村のアイデンティティ、村の富を象徴する媒体として機能しています。今回、比較的着手しやすいトングゴンの制作とゴングの演奏に村の方の協力を得て取り組みました。目標は2つ。まず楽器の制作と演奏を通して村の歴史や風俗を探ろうという目標です。村の歴史や風俗は姿を変えることのない伝統楽器を通して調査するのが最適です。また伝統芸能や文化の担い手が不足している現状を変えるため、少しでも若者に体験する機会を与え、自分たちの伝統を再認識していただき、次世代へと繋げたいという目標です。現地で制作したトングゴンとは竹の楽器であり、日本で言うところの琴に近いです。演奏方法は両手で本体を抱え、弦をはじくようにして音色を奏でます。制作工程は至って簡単で全て手作業です。9月19日、竹あかりを作り終わった私たちはトングゴンを制作すべく、村の若者達に導かれ周辺にある雑木林に竹を採集しに行きました。竹を採集しその場で適切な長さにかットした後、村に持ち帰って作業開始です。

作業の工程としては最初にバラン（現地で用いられる鉈）で竹の表面を糸状に細く裂いて弦を作ります。次に小さく切った竹片を弦と本体の間に挟み込み、弦を張ります。そして最後に音を反響をさせるために本体の裏に空洞を開けて完成です。調律はブアイヤン村で調律の技術を持つ貴重な存在であるアンジェラさんにして頂きました。手順は一見簡単そうですが、実際に取り組むと一つ一つの作業に集中力を要し、伝統楽器の制作は簡単ではないことを実感しました。

さて、ブアイヤン村の生物文化遺産の家には6つのゴングが吊り下げられており、昼夜、村一帯にゴングの奏でる独特なビートと音色が響き渡ります。特に宴会などの村の一大イベントの際にはゴングは場を盛り上げる楽器として一役買い、音色に合わせてダンスも踊ります。私たちがゴングに興味を示していたところ村の方たちが演奏方法をレクチャーして下さい、夜な夜なセッションが始まりました。

活動を通して気づいたのは村の若者が伝統文化の担い手として制作や演奏に積極的に関わっていることです。この体験は村の未来性を感じさせるものとなりました。

奏でる和音



想いを3次元モデルで

ブアイヤン村を訪れる私たちを包み込んで受け入れてくださる方々の圧倒的な優しさ、おおらかさ、思いやり、気遣い、そして純粋さに、私たちは驚き、大きな感銘を受けました。昨年はコロナ禍が明けてから初めての対面での現地渡航で、学生たちの受け入れは久しぶりの機会だったにも関わらず、村の方々の素晴らしいチームプレーのおかげで快適で実りある滞在を成し遂げることができました。

一方で、課題があると気付いた方々もいたようです。村の方々が感じている現状と問題点を、鳥瞰図的に客観的に見返しつつ表現してもらおうと、3次元モデルの表現方法を試みることにしました。この手法は、昨年テンギランのフォーエバーサバというNGOの方々に教わった方法で、心理療法の一つにある箱庭療法に近く、先住民の若者たちのように、自分たちの感じている現状や課題を言語化して伝えるのが難しいときに、3次元空間で表現することで、自分たちの課題と解決策を明確化していくことを目指すものです。今回は、ブアイヤン村の若者たちに、学生の受け入れについて、また自分たちの村が置かれた現状について、3Dモデルで表現し、将来起きるかもしれない問題をどのように解決していきたいか、説明してもらいました。

ブアイヤン村は今、大きな転換期に直面しています。DISSOLVAが活動を始めた頃に開通した泥道は、来年には舗装されるという話です。こうした道路整備は、ダム建設の話が持ち上がるたびに前進しますが、これまで孤立しながらも村の方々が保ってきた独特の共同体的エコロジーは、この間少少しずつ変化してきています。若者たちは村でのゆったりと安定した暮らしよりも、町で賃金を稼ぎながら生活することを選ぶことが増えてきています。

私たちの活動は、その変化に直面しながらも、町での暮らしの窮屈さを実感して、村に戻ってくる若者たちに、共に考え活動し、寝食を共にして、分かち合う時間を大切にする機会をつくってきたとも言えますが、一方で、町での暮らしに成功し、そのさまざまな要請が強まるなかでは、村での生活をゆつたりと楽しむ余裕が見出せなくなってきたとも言えます。舗装道路ができれば行き来はしやすくなるはずだから、将来は必ず村に戻って豊かな自然の中で子育てをしたり、動物を飼って、農業や伝統的手芸のビジネスを担ったりしたいと語りながら、今は町に住まわざるを得ないのだという自分自身の選択に自信を持って納得していた様子でした。

伝える未来



水利権と水害予防に

クロッカーレンジ山脈のパパール渓谷の中
山間部に位置するブアイヤン村には、複数の
川が合流して湾曲した部分に、一定規模の平
地が広がり、水田耕作が可能になっています。
時には、大洪水を起こす急流の兩岸にあって、
耕作面積はそれほど広くないので、大規模な
機械耕作には向いていませんが、それでもこ
の土地に暮らし、手作業で稲作をする数十家
族程度の人口を養うには十分な田んぼの広
さです。大切なのは、それぞれの田んぼに安
定して水が供給されているということです。
昨年度、SRI高収量稲作法やぼかし肥
料の施肥に挑戦した際には、土づくりより
も、豊かで安定した水の供給の方が、この村
での農業成功の秘訣だということがわかりま
した。その水路と水路維持に関わる村の方々
の知恵について、今回は学んでみたいと思っ
ました。

また、生物文化遺産の家（ビオブダヤ）の
床下を流れる小川が氾濫し、周囲が水浸しに
なる問題の解決方法の一つとして、この小川
の流れを変えたり、小さな貯水池を造ったり
することを提案した際、この小川の先には田
んぼがあるから、その田んぼの水が不足する
ようなことに繋がりがかねず、ダメだと断られ
たため、大切な田んぼの水路はどのように
なっているか、興味が湧きました。
結局、ビオブダヤの真下のパパール川北岸
に位置する田んぼは、所有者であるアイワ
ンさんも教会の伝道師の仕事で忙しく、息子
たちは町に出てしまったため、耕作放棄地に
なっています。今回は、対岸のモニニバル
地区の田んぼの水の供給について、調査する
ことにしました。
ブアイヤン村で一番広い面積を誇るモニニ
バル地区の田んぼは、パパール川南岸沿い
に幅数百メートルで、南東から北西に約1キ
ロメートル続いています。その南東の端にあ
るのが、これらの田んぼを潤す水を供給する
水源で、南側の山から流れ出る小川から、複
数に分かれる水路を引いています。水源を守
るのは、長らく村長を務めてきたジョンさん
一家です。今回は、娘のアロイシアさんに水
路の説明してもらいました。まず、水源と
なる小川から開削して誘導された水路は、二
手に分水され、一方は東南端にあるアロイシ
アさんの田んぼを潤し、もう一方はその先に
北西へと広がる耕作地に向けて田んぼの外側
を流れていきます。
このように、何回か分水しながら、モニニ
バル地区の全ての田んぼに水が回るように
工夫されています。

田を潤す水



パンボルネオ高速道路

ボルネオに到着して翌日から2泊させていただいたのが、ジティロンさん一家がクアイ村で営むホームステイのコトスジティロンでした。

昨年は、日本由来の「ぼかし肥料」作りで、地域の青果市場から出る生ごみ処理の問題解決をしていた息子ノエルさんに話を聞いたり、すぐそばの「モンソピア文化村」で先住民の暮らしや歴史を学んだりしたのですが、衝撃的だったのは、森の中の先住民文化施設の真裏に、高速道路建設のための赤土の荒野が剥き出しになっていたことでした。これこそが、パンボルネオ高速道路です。ここ数年、政府の計画が右往左往し、ルートが定まっていませんでしたが、最終的に木がなぎ倒され山が切り崩されたのは、昔から先住民居住地域とみなされてきた自然豊かな場所でした。

ジティロンさん一家は、伝説の勇者モンソピアの子孫で、何世代も前から地域の名士として、植民地時代は英帝国の官吏と、独立以降は半島の政府と、一定の関係を保ってきた家柄です。山村の住民とは違って、教育水準は高く、家族全員が英語が話せて、洗練された都会の住民のように暮らしていますが、一方では先祖伝来の伝統的

な慣習や生活の知恵にも強い関心を持ち、伝統文化の維持に注力してきました。今回は、ジティロンさんとお兄さんが所有していた小さな丘と森、そして水田が、高速道路の建設によって切り崩され砂利で覆われた姿を見学しました。

元々、ジティロンさんとお兄さんの家はモンソピア文化村を挟んで、細い道でつながっていましたが、その道は寸断され、今はまだ高速道路の車がなく歩いて渡れるものの、いずれは兄弟の行き来は難しくなります。高速道路脇の崩れた家屋や、道から低く下がってしまった元の田んぼの場所を指さして、かつて何がそこにあったか、豊かな森と田畑、土地に根差した安定した暮らしぶりについて、懐かしそうに話をしてくれました。

ジティロンさんは悔しそうな顔は見せませんでしたが、政府の高速道路建設ルート確定の知らせを受けてから、ごく短時間に、建設反対の集会を開く間もなく、用地の買取と掘削が進められ、思い悩んで決断を迫られた別の家族は住宅ギリギリまで切り崩され、最終的に削り取られていく姿をジティロンさんは克明に写真や動画に記録していました。

田を覆う道



暮らしを守る森と大河

私たちはトレッキングでブアイヤン村に向かい、また滞在1週間後と同じ道を歩いて戻りました。道中、想像をはるかに超える自然の厳しさ、村の方々の逞しさに触れる貴重な経験となりました。

村へ向かう道は、まさに自然との対話でした。ところどころ朽ち果てかけた木橋を渡る際には、一歩踏み出す度に橋が軋み、その脆さにヒヤヒヤさせられました。特に、橋のない川を渡る場面は、忘れられない体験となりました。ウォータースニーカーに履き替え、膝まで水に浸かりながら、滑りやすい川底を注意深く進んでいきます。普段の生活では味わえない、スリルと同時に、自然の力強さを感じました。

しかし、最も印象に残ったのは、村の方々の姿です。重い荷物を背負いながらも、軽快な足取りで私たちを先導してくれました。険しい山道を歩く彼らの姿は、まるで山の一部であるかのように自然に溶け込んでいました。その様子を見て、日ごろの自分の体力不足を痛感するとともに、彼らの逞しさに深く感銘を受けました。

この山奥に、何世代にもわたって暮らし続けてきた彼らの祖先は、山道を歩き、橋のない川を渡って、ジャングルの中を突き進む以外に、外の世界と交流する術を持っていませんでしたが、その伝統的なライフスタイルは今まさに変

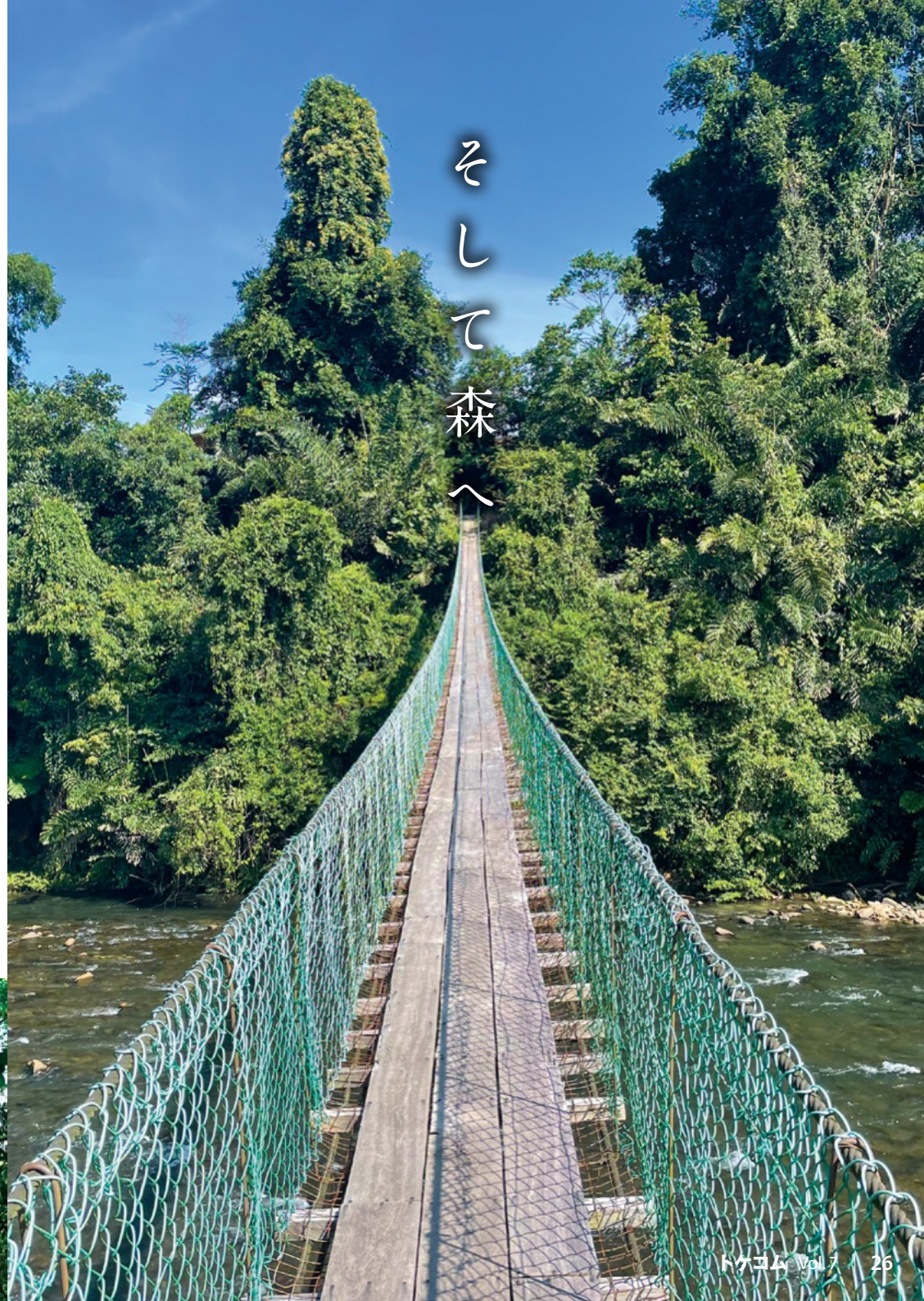
化する途上にあります。

DIS SOLVAがこの地を訪れるようになった頃、政府の補助によりシャベルカーを用いて泥道が開削され、4輪駆動車での往来ができるようになりました。道路の開削は、パパール川流域がダム建設候補地として脚光を浴びた最中に進められました。一旦、開発を推進する政府の汚職事件が明るみに出て、ダム建設は棚上げされましたが、昨年はまたダム設置場所をやや下流に移した形で、建設計画が再開されました。そして同時に、ブアイヤン村まで続く舗装道路の敷設を政府は約束しました。

かつて、彼ら山の民の祖先は、海から川を伝って上流にやってくる海の民と、その政治的支配から逃れるために、パパール川上流を自分たちの暮らしを守るために最適な場所として選びました。ボルネオ西岸で一番のパパール川は、普段は砂利の浅瀬が広がり、大雨の時は十数メートルまで水かさが増して大河になります。海の民は、このパパール川を小舟で遡って、山奥に上がってくることはできませんでした。

こうしてパパール川流域の暮らしは守られ、そこに生きる村の方々は、海の民と上手に距離を保ちながら、首狩り族として恐れられ、重力に反して石を立てられるほどのマジカルな力と逞しさを身につけてきたのです。

そして森へ



DISSOLVA

学内での事前・事後活動



事前準備・遠隔交流ミーティング
Zoom Meeting with Kij. Buayan p.30-31



事前準備・夏山トレッキング
Summer Mountain Trekking p.32-33



事前準備・八ヶ岳合宿
Yatsugatake Mountain Sleepover p.34-35



事後活動・大学祭
Making Asian Noodles at the fete p.36-37

物資回収



5月視察



■ 現地視察で今を知る

ブアイヤン村の受け入れの状況を見せってもらうために、5月はじめに、引率者が現地視察に行きました。四輪駆動車でボルネオ島サバ州西岸のクロツカールンジ山脈の中腹にあるブアイヤン村に向かうため、泥道を進むと、道路工事現場視察の車両とすれ違いました。2023年の夏以来、ここ数年間は沈静化していたパール川ダム建設の問題が、再燃してきており、それと並行して、山奥のブアイヤン村に通じる舗装道路を敷設する計画が進んできています。道路工事の関係者は、2025年夏までに道路を開通させると言いました。2013年に4輪駆動車が通れる泥道が掘削されたから、村の暮らしは大きく変わりましたが、今度は舗装道路が敷設されれば、一般の乗用車でもこの山奥の村まで容易に人が出入りできるようになります。

村の方々は、複雑な気持ちで環境変化の兆しに立ち向かおうとしています。今年9月にブアイヤン村を訪れる私たちにとっても、変わりつつある現地の姿を知ることが、世界中で起きている過疎化の問題を考える上で一助となります。でも、変化しないのは村の方の助け合いの精神と民主的な話し合いの場の持ち方です。

今回も、9月の学生受け入れに先立って、村のほぼ全家族の方々が集まってくれて、活動内容やホームステイ、食事づくりの担当など、全員参加の話し合いで決めてくださいました。みんなの合意のもとで物事が進んでいく、民主主義のお手本がこの村にはあります。

■ Zoom 交流と支援物資回収

2024年度は、毎週木曜日にZoomを活用した現地とのオンライン中継で定期ミーティングを行いました。毎週進行役を決め、ドゥスン語の挨拶によって始まり、終わるミーティングで、ドゥスン語に親しむことができました。

各プロジェクトで必要となる資材や具体的な活動内容について、現地のリアルタイムな状況を踏まえながら、検討を進めました。まず最初に、メンバー全員が力を合わせて準備したのが、ボルネオ島のドゥスン人のカーマタン収穫祭を祝う「タダウ・カーマタン（収穫祭の日）」という歌を全員一節ずつドゥスン語で歌って動画を撮り、現地にWhatsAppでプレゼントするという企画でした。目白キャンパス内の自分の好きなスポットで映像を撮って、学習院の紹介とメンバーの自己紹介を兼ねて行いました。「Pounsikou ポンシコー」とは、ありがとうの意味します。

このような取り組みを通じて、現地の挨拶言葉も少しずつ覚えられました。事前準備期間の後半には、村への支援物資の回収を行いました。学生ホールの一角にスペースを設け、折り畳み傘、懐中電灯、3Dモデリング用の人形の寄付を募りました。校内に立て看板を設置するなど、宣伝活動にも力を注ぎました。興味をもって見に来てくださる方もいらっしやり、活動を知ってもらうことができたと思います。



Dハイク



■ D-IHIKE 1 小仏峠〜高尾山
 新しいメンバーも加わり今年度はじめてのD-IHIKEとなりました。卒業生のマリナ先輩も一緒にしてください、身の引き締まる思いの学生もいたと思います。役割を意識しながらペースを調整したり、地図を確認したり。6月初めの高尾山、歩いてみると蒸し暑く感じられるほどでした。次第にしっかりとした白いもやに包まれ、雨が降り出しました。雨具を着込み登頂を果たし、パチリと記念写真。みんな合羽を着てかわいらしいです。ちょうどザーッと雨が強まってきたので、雨宿りをしながら一息つくことに。すっかり肌寒くなるものの、座ってお菓子を食べたりおしゃべりをしたりしてぐっと距離も縮まった気がします。そんな帰り道、約50cmもの大きなミミズに遭遇するという驚きの瞬間もありました。山登り後には美味しいお団子を楽しみ、雨の日の高尾山を満喫した締めくくりとなりました。

■ D-IHIKE 2 高尾山〜相模湖
 6月中旬、夏をも感じさせるような眩しい日に、高尾山から城山を経由し相模湖へ行きました。澄んだ空の下、同じく水色の紫陽花が元気に咲き、出発を応援しているようなかのようなでした。カルロス先生も一緒に参加され、スペインのお話を伺ったり、その優しさに触れる交流の機会になりました。今回は、病院裏ルートはやや急な勾配から登りました。山に入ると、木々

が日影を作ってくれるのがありがたかったです。

城山でのお昼休憩では、なめこの味噌汁をいただきました。汗をかいた身体に塩分がしみわたります。十分に休憩したところで、相模湖方面へと向かいました。道中、昨年と同じく田んぼに植わる苗やオタマジャクシを目にし、安心感を覚えました。相模湖は、水力発電を目的としたダム建設によってできた湖です。戦時中からの建設に伴い、湖の底に沈んだ村もあります。登山後にスワンボートで湖上を散策し、思いを馳せました。

■ D-IHIKE 3 陣馬山
 3度目のD-IHIKEでは神奈川県と東京都の都県境にそびえる標高855mの陣馬山を訪れました。7月以降、新しく加入した1年生のメンバーを交えてのトレッキングとなりました。天候にも恵まれ、登山中も眺望が利くトレッキングコースであったため、夏の太陽に照らされた青々とした自然を全身に感じながら、「暑さにどう対抗するか」を考えさせられるトレッキングとなりました。山の途中には所々にトイレが設置されていますが、トイレレットペーパーは置いてありません。自分でトイレレットペーパーを持って来る必要があります。また、必ずしもトイレが綺麗

麗だとは限りません。現地の村のトイレは庭に設置しており、トイレレットペーパーを流せず、ビニール袋に入れる方式でした。スリッパやウォシュレットなんぞもつてのほかです。海外に行った経験は日本がどれだけ綺麗な国かということも教えてくれた気がします。

■ D-IHIKE 4 御岳山〜大岳山
 今年最後のD-IHIKEでは御岳山から標高1200mの大岳山に挑戦しました。あいにくの雨でしたが話が途切れることなく、雨に濡れた自然を楽しみながら無事登頂しました。現地での登山は日本よりも雨が降りやすい気候となっているため、雨の中山登りをしたことは良い経験となりました。現地では全員で歩調を合わせて登るのが好ましいですが、どうしても体力の差によって3つほどのグループに分かれて登ることになってしまいます。グループの先頭の人は適宜後ろのメンバーに気を使いながらも、前のグループから大きく遅れを取らないようにする必要があります。また、滑りやすい部分や大きな段差などにいち早く気づき、注意を呼びかけることも大切です。このD-IHIKEには5人が参加しましたが、ちょうど1グループの人数と同じくらいの人数で、良い予行練習になりました。



八ヶ岳合宿



■ 8月の八ヶ岳トレッキング

同じ宿で寝食を共にした1泊2日の八ヶ岳合宿は、毎週木曜日のミーティングや日帰りのD-HIKEを重ねたメンバーたちにとってより親睦を深める良い機会となりました。駅から登山開始地点までは山小屋の迎車で移動し、慣れない車移動で酔いかけた人もいました。意識朦朧としながら現地に酔い止めを持っていくことを強く誓ったのを覚えています。登山開始後数時間は曇りながらも日が差し込み、丁度良い気候の中気持ちよくトレッキングを楽しんでいました。だんだんと雲が多くなり次第に雨が降り出しました。予定時間通りに昼食としてカレーライスを食べただき、さあ山荘へ向かおうと扉を開けると、雨がより激しく打ちつけており、明らかにテンションの下がった空気感の中登山を再開しました。登っている途中からテンションに左右されない無地の地に突入し、気づいた時には頭上の森林が開かれて霧の中にすっぽりとおさまってしまいました。山荘に到着する頃には体も冷え切っていました。山荘の扉を開けると暖かい空気が流れてきて、衣食住の「住」の温かみを実感できた瞬間でもありました。

山荘到着後は各自お風呂を済ませながら、残った人たちは現地であう歌を練習しました。お風呂ではバケツにたっぷりのお湯を1人3杯までしか使えないというトレッキング初心者には経験したことのない試練が待ち構えていましたが、家のお風呂とは異なる開放感を味わえました。

歌の練習では慣れない洋楽やドゥスン語に苦戦しつつも、歌詞を訳された日本語で解釈するのではなく、何度も原曲を聴きながらなるべく原語のまま雰囲気を感じ取って楽しく歌うことを心がけました。夕食は非常に豪華なもので、おかずの多さに驚きまし

た。男女関わらずご飯をおかわりし、次の日のトレッキングに備えることができました。夕食後は現地でのプロジェクトに備えて、いつ何を準備するべきかを逆算した計画を立てました。昨年渡航したメンバーの体験談を参考にしながら、村人たちに自分たちが成し遂げたいプロジェクトを正確に伝えるためにはどのようにしたら良いのか、プロジェクトが順調に進まなかった場合や、天候に左右されてしまった場合など数々のパターンを考えることで少しでも現地での行動がスムーズになるように努力しました。また、昨年にはなかつた高等師範学校での交流活動の内容がこの時点でまだ何も決まっていないことに気づき狼狽えた瞬間もありました。実際、高等師範学校訪問はレッドカーペットと大人数の拍手喝采で迎えられ、終始萎縮してしまうほどの歓迎ムードで問題なく終了したことはこの時には知る由もありません。2日目の朝は明け方から始まりました。なんで日の出を見るために早起しなきゃいけないのだと山の寒さに凍えそうになりながら頭の中に文句が浮かんできましたが、だんだん空が明るくなってきて日の出が顔を出すと、都内では決して見ることでできない幻想的な景色が一望できました。山荘に戻って用意していた朝食を美味しくいただき、天狗岳や第二展望台を目指して登山を開始しました。曇一つない晴天に迎えられ、気持ちよくスタートを切り、調子よく天狗岳に到着しました。後ろを振り向くとこれまで歩いてきた山が見え、「これ

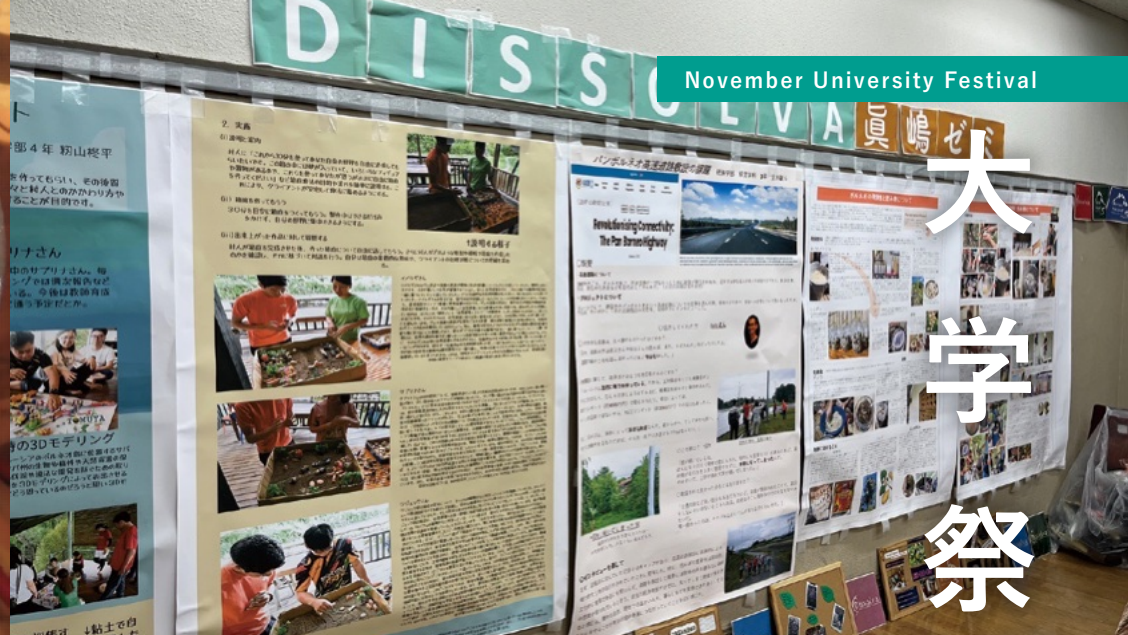
だけ登ってきた！」という達成感を感じました。天狗岳から第二展望台までの道のりはD-HIKEでも経験したことのないほどに険しく、慎重に歩を進める必要がありました。一歩踏み間違えれば転倒してどこを強打するかわからない緊張感に包まれながらも、お互いに励まし合いながら第二展望台に到着しました。休憩をしながら「ここからは下山するだけだ！」と気合を入れ直して再出発したものの、下りても下りても続く険しい道。時々これまで下りた分が全部無駄になるのではないかと思うほどの傾斜を上ったり、どうやって生えて生き延びているのかわからない木の幹を跨いだり、自然の強さを感じることはありません。足の感覚などまるでない時間を悶々と過ごし耐え抜いた先に川を見つければ、唐沢温泉が見えた時、緊張がほぐれたからか全身からどつと疲労が押し寄せました。そんな疲労にびびったりの温泉に心身ともに癒され、昼食として山菜そばをいただきました。優しいつゆの旨みと山菜の素朴な味わいが疲れた身体に染み渡り、最高の昼食となりました。八ヶ岳合宿は1泊2日の短い時間でしたが、大自然の中トレッキングに取り組み衣食住を共にすることで、チームとして「1つのことを成し遂げる」ことを初めて経験できました。また、自分の体力がどこまで通用するのか、雨具に故障がないか、休憩時のベストな過ごし方など、現地の登山に向けて自分や身の回りを見つめ直す結果となり、渡航に向けての最終調整を進めるきっかけとなりました。



大学祭



アジアンヌードル



■ 今年は何ノムコーヒーの試飲

DISSOLVAボルネオプロジェクトでは毎年、大学祭での展示報告を一つの目標に取り組んでいます。現地渡航を終え2学期も早々、大学祭への教室展示に向けたポスター制作に取りかかりました。プロジェクトを通して学んだことをまとめ、展示教室に貼り出してみると、メンバーそれぞれ多様な視点でボルネオを見ていたと感じました。

展示教室では、出店の鶏麵「ソトアヤム」をご購入いただいたお客様に、今年は何ノムコーヒー試飲券を配布しました。テノムコーヒーは、サバ州テノムという場所で作られた伝統的なコーヒーです。少し甘味があり、コーヒーが苦手な方でも楽しめます。文化祭当日の教室は、前年度よりも賑わいを見せていました。出店から教室まで動線がわかりやすかったのもあり、沢山の人がソトアヤムを手にとり教室に足を運んで下さいました。多くの方にプロジェクトや、ボルネオの存在について紹介することができました。

■ 名物のソトアヤムは準備万端

コロナ禍で大学祭中止により、レシピもコツも曖昧だった昨年、不安と期待を抱きつつ再開した出店は、多くの団体が参加するG1グランプリで第5位として入賞。今年には昨年の経験が活かされて、リピーターを含めて多くの方が行列を作りました。その結果、約1256杯完売の大盛況で、G1グランプリは第2位にて準備優勝！ 成功裏に終わった今年の出店には、実は

メンバーの計りきれない努力が刻み込まれています。会計班は朝早くから夕方遅くまでお金の準備や清算特に今年は紙の食券とペイペイの2種類の会計方法を頭を悩ませ、販売班はピラとポスター作りと配り、席を外せない方々に出前も行いました。

1日目の雨の中、多くの方がきてくださったことは、見えないところでの販売班が動いてくれたおかげでしょう。「雨」は一番対処したい出来事です。いくら「お寒い中での温かいアジアンヌードル」というキャッチフレーズを言っても、一息つけるくつろぎの教室があったからこそ、雨の中でも成功に繋がりが、そういった一連の動きが、多くの方々にDISSOLVAと真嶋ゼミを知ってもらうきっかけになったと思います。出店の心臓料理班は、朝早くから仕込み初め、夕方遅くまで締め作業で、疲れがたまると、みんなで一心同体となるので、面白い裏話が多く出るほどに輝いています。

今年いい成績を取めたので、来年へと期待が繋がります。その期待に応えるために、変わらずにスパイスの香りを惜しむことなく鍋に移して、鶏もも肉は、ちょうどいい歯応えができるよう茹でて、気持ち大きめのひと口サイズに調整したら、口の中が寂しくないようにキャベツともやして食感をフォローし、温かくほどけた米の麺の上に野菜、肉を乗せ、秘伝の汁を注いだら、おいしいと評判のソトアヤム、完成させましょう。後はお客様一人一人の嗜好に合わせて、小ネギやパクチーなどのトッピングを載せるだけです。来年も乞うご期待！





DISSOLVA

チームメンバーの紹介

フォト・エッセイスト 梶山柁平 & 元木芙美子

Photo essayists p.52~55



ミュージック&ワーク 政田幸輝 & 福士響

Music & work leaders p.56~59



引率教員スタッフからのメッセージ

Staff's Message p.60~65



リーダー 中村仁子 & 鈴木琉生

Group leaders p.40~43



アドバイザー 上岡鈴奈 & 高田悠一郎

Group advisors p.44~47



プロヴィジョンズ 並木駿斗 & 林杏紗

Provision leaders p.48~51

Group Leader

中村仁子

NIKO NAKAMURA (ニコ)

学習院大学経済学部経済学科2年
男子メンバーの無茶振りをにっこり笑顔で無視するスキルの持ち主。現地では相手の体調によってテンションを合わせながら上手にコミュニケーションを取っていた。フィギュアスケート部主将。

異文化×ボランティア

フィリピンのセブ島で短期留学を経験していた中村さん。短期留学では異文化に触れ、体験することの楽しさを知ったといいます。セブ島よりも自然に囲まれ自給自足の生活を営むブアイアン村でしか感じることでできない新たな気づきを求め、トレッキング経験が少ないながらもDISSOLVA参加を志望しました。また、ボランティア経験を通して社会参加意欲を充足させるだけでなく、現地の人々から様々なことを吸収し、生きる上で大切なことを学びたいとしていました。

長年のフィギュアスケート経験を通じて、音楽やダンスなど芸術的観点から活動をサポートしたいと強く望みました。

全幅の信頼

困ったことがあれば彼女を頼らない者はいないと言えるほど、メンバーからの信頼が厚い中村さん。自分の担当以外のプロジェクトでも気を抜くことなく、常に真面目に行動していました。柔和で細かな気配りができる中村さんは、何事も否定から入るのではなくまずは相手を肯定し、そこから一緒に考えていくというプロセスを徹底しています。

先輩からも後輩からも慕われ、誰からでも親しみを感じさせる長所は、村の子供達との交流で最大限発揮されました。言語も年齢も異なる子供と笑顔で交流していた中村さんは、「異文化交流を楽しむ」という自身の目標を達成し、それ以上のものを得ていたように思えます。

「違う」に悩んだ渡航期間

チームからの信頼が厚く、周りへの気配りを欠かさない中村さんですが、「渡航期間の前半は早く日本に帰りたいと心から思っていた」と本音を吐露します。村は温水が出ないシャワー、洗濯物は手洗い、寝室にゴキブリやサソリのような虫がわらわら出てくる生活環境で戸惑ったといいます。

また、村人たちは東京での生活のように常に時間を意識して、5分前行動が褒められる価値観を持ち合わせていません。プロジェクトが始まる時間になってもなかなか姿を現さないことは日常茶飯事です。言語も通じない、価値観も合わない。そんなギャップに悩まされながらも、日々プロジェクトに取り組まなければならない。しかし中村さんの葛藤は、村で生活するにつれて徐々に形を変えていきます。

観光？ ローカル？

中村さんは、セブ島での短期留学やマレーシアのボルネオでは、片端から観光地を訪れるのではなく現地の方とゆったりした時間の中で交流することが多かったといいます。「ローカルな方々と関わり、観光客だけでは行くことのできない場所を訪れることができて、海外の人々の優しさを直接的に感じ取れることが多くあった。一方で観光地は、ある意味完成されている世界観に圧倒され、納得せざるを得ない部分が多い。私にとってはローカルな人々との交流、他愛もない会話や時間が大切だと学べた」と語りました。未完成な部分があるからこそ、その不十分さを心を馳せ、完璧を求めない心持ちが葛藤を薄れさせたのかもしれない。



鈴木琉生

RYUSEI SUZUKI (ベル)

学習院大学経済学部経済学科4年
今回で二度目の渡航。昨年の経験
を活かしメンバーの中心的存在を
担う。持ち前の社交術で現地で
関わる人々を虜にする。グループ
リーダーとして活躍した。

現地の方々への感謝

「今年とは昨年度と違い、事前に単語等の準備が出来ます。渡航が叶ったあかつきには、昨年度の感謝や自身の紹介等を行いコミュニケーションを図りたいと考えております」と事前のインタビューでおっしゃっています。現地では言葉の壁がありつつもそれを決して感じさせない持ち前の対話術で現地民との交流を楽しんでいました。今回で二度目の参加となる鈴木さんは「現地での暮らしや交流はとても貴重な経験でした。この感謝を忘れることなく、もう一度彼らと会い、活動を共にしたく、再びサバ州に赴きたい」とも語っていました。前回とはまた少し違った視点での参加となり、村の方々への感謝という意味合いのこもった参加となりました。

メンバーの架け橋的存在

その柔らかな性格から全メンバーから慕われる鈴木さんは普段の活動の際も、場に和やかな空気感を与え、初対面のメンバーもいる中分け隔てなくコミュニケーションを取り、渡航前のメンバー間の緊張感を取り払いプロジェクトメンバー全体の架け橋的存在を担ってくれました。現地では初参加のメンバーも多い中前回の渡航経験を活かし、鈴木さんについていけば大丈夫という安心感をメンバーに与えてくれました。はしやぎ時ははしやぎ真面目に取り組むときは率先して取り組むなどメリハリの良さを見せ、チームが誤った方向に進まないように全体の

舵を取るといった役割も発揮してくれました。

現地民との交流

その明るさと人の好きから老若男女問わず現地の方々から愛され、ブアイヤン村滞在期間は村の子供に懐かれ、一時期父親のような風格を放っていました。また、二日目に訪れた高等師範学校では伝統ダンスの最初の掛け声を任されるなど万人から好かれる人の好きを現地で再確認しました。

競争心が強いといった一面もあり、村で開かれた運動会では、リレーの種目で村の方々を抑えて一位を獲得しました。鈴木さんは常日頃から感謝を忘れず、現地の村民、店員さんに対しても必ず感謝の言葉を忘れません。そうした態度は現地の方にも伝わったことでしょう。

ブアイヤン村における水害と水利権に関して

鈴木さんはゼミの卒論研究でブアイヤン村の水利権に関して研究をしています。今回は昨年行われたレイニングプロジェクトの継続に加えて、村の多くの田んぼを所有するアロイシアさんにインタビューを行い、ブアイヤン村の田んぼについて調査を行いました。田んぼ写真を撮り、積極的に現地の方に話を伺いメモを取っている姿が印象的でした。

今回の経験を今後の卒論の執筆に役立ててほしいと思います。

Group Advisor

上岡 鈴奈

REINA KAMIOKA (レイナ)

学習院大学経済学部経済学科3年
DISSOLVAイチ気遣いのできるしっかり者。常に周囲のことを気かけ、頼りになる存在。どんな状況でも笑顔で絶やさぬ心の強さを持つ。

DISSOLVA 6期生

一昨年からDISSOLVAに参加している上岡鈴奈さんは、今回の渡航でアドバイザーを務めてくれました。優しく思いやりに満ちた彼女は、DISSOLVAが心地良く、失いたくない居場所だと語ります。今年度三年生の上岡さん。長く活動に参加する中で、頼もしい先輩たちの背中を追いかけてきた彼女にとって「三年生」は、かっこよく、そして心強い特別な存在です。自分がその学年になった今、これまでの世代が土台を築いてくれた活動を次の世代へつなげていきたいという使命感が、志望動機にもあふれていました。その強い思いは、他のチームメンバーや村の方々をはじめとして周囲の多くの人々の心に刺さり、それぞれのプロジェクトや、今回の活動全体を成功に導いた原動力であることは間違いありません。

頼られる存在

穏やかな雰囲気の魅力の上岡さんですが、現地に行つてからはもちろん日本でも、やるべきことを把握し、誰よりも率先して行動できるしっかり者です。昨年渡航した経験を活かし、どの係の仕事にも気を配り、メンバーが自分の役割を理解するのを促してくれました。彼女の助けがなければ成し遂げられなかったことは数えきれないほどあります。上岡さん一人でも何人分もの働きをする、まさに八面六臂の活躍で、DISSOLVAには欠かせない存在です。渡航の事前準備として、Zoom交流の中で現地の言葉であるドゥスン語を学ぶときには、必ず教わったことをノートにメモし、食欲に知識を吸収していました。わかりやすくまとめられたノートから、学習意欲の高さに驚かされるとともに、ノートの端々に描かれた可愛いイラストに癒されます。その学習の成果もあり、ドゥスン語での

挨拶は完璧で、他のメンバーに教えてくれるほどです。現地では、覚えた単語を用いて村の人々との積極的なコミュニケーションを楽しんでいました。

常に全力投球

上岡さんは、どんな環境でもすぐに寝られるという、村での生活にはぴったりの特技を持っています。同じお宅にホームステイしていた三人が、「暑くて寝られない」と、クーラーの効いた快適な睡眠環境を懐かしんでいたときも、上岡さんは蚊帳に入って横になるとすぐに眠りについていました。そんなサバイバルな一面を持つ上岡さんは、何事にも全力で取り組み、その真面目さはチームメンバーへの良い刺激となります。村で行われた運動会では、真剣かつ本気で挑み、圧倒的な差をつけて勝利を手にしたときの弾ける笑顔で、周りをあつという間に明るくしました。

気配りの体現

トレーニングでも全く疲れを見せず、メンバーの体調や疲れ具合を聞いたり、お菓子をくれたりと、どんなに困難な状況にあつても、明るい笑顔と相手への気配りを絶やしません。こちらが心配になるほど自分のことより周りのことを考えて行動する上岡さん。実は、彼女のこのような姿勢は、昨年ブアイヤン村で過ごしたことで芽生えたようです。村の方々は、自分たちのことは後回しにして、私たちの生活や、プロジェクトを支えることを優先してくださいます。その姿を目の当たりにした上岡さんは、自分も相手を気遣う余裕を持つことを心に決めました。そして今年、どんな時でも周囲への気配りを欠かさない上岡さんの姿からは、この活動を続けることで得られたものの大きさを窺い知ることができます。



Group Adviser

高田悠一郎

YUICHIRO TAKADA (タク)

学習院大学経済学部経済学科3年
活力あふれる筋肉質。なんでも率先して指揮をとり、俊敏な動きを見せる。趣味は筋トレとバードウォッチングで、ダンベルを持ち上げながら鳥を見ることが多い。どんな環境でも筋トレを惜しまない活動家。

寛大なコミュニケーション

彼のユーモアある会話力と、誰にでも話しかけようという積極的な会話の姿勢はたまげたものです。そこには、国や性格の違いなどを考慮せずに皆で会話のキャッチボールを楽しもうという素晴らしい心意気が現われているような気がします。実際、現地では、村の子供たちからご年配まで様々な分野の話を繰り広げている姿を幾度も目にしました。

彼自身の筋肉に対する美学や、空手について現地の方に話しながらも、現地の方から文化的な違いを教わる積極的な態度は多くの人々の心を開いたのだらうと思います。

冷静沈着な判断、先見の明を有する者

そんな彼がプロジェクトに取り掛かると一変、冷静な目つきで集中力を発揮させます。石運びの際にも、ただ運ぶという目的だけでなく、非常に効率的な運びを行い、判断力の高さをうかがわせました。また、彼の強靱な肉体を駆使しながら、非常にスピーディーな動きを見せ、メリハリある行動を行いました。物事を行うにはまず、最善の方法を頭で考え、それをすぐに実行する、そんな姿は私たちにも影響を与え、彼の大きな背中では他のメンバーへの行動に積極性を促し、リーダーシップを発揮したといえるでしょう。

高いかな笑いを養っているプロノ歌手

彼は、素晴らしいトークスキルを持つとともに、高らかな笑い声を持つ歌手でもあります。その歌声とは、会話中に思わず心が弾むような響き渡る笑い声でした。静かに夜を迎えようと夕日が日の入りの準備を進める静かな夕暮れ時に、彼が放つ伸びやかな歌声によって、村の一大帯は大きなホールへと化し、それが私たちそして、現地の人々に元気を与えたと、伝説が残っています。

また、非常に快活なこの歌声を取得しようと、彼は、笑い声のセミナーを開いたこともありました。メンバーたちは笑い声を真似し、それがもたらすエナジーを次々と再認識しました。

竹あかりの親方

前年度からの経験則を持つ彼は、竹あかり作成においても非常に機能しました。このプロジェクトに関してまだ経験の浅い者ではわからない、寸法や竹切断の技術など、それらすべてを可能にできる実行力の高さを持っていたことで、彼は竹あかり及び竹関連のプロジェクトにおいて親方的存在として皆を指導しました。指導するだけでなく、実際にそれらを実行する姿を見せるところは彼の信頼の置ける理由であるのだと思います。その信頼はもちろん、現地の方にも届いていたと思います。



Provisions Leader

並木駿斗

SHUNTO NAMIKI (シュン)

学習院大学経済学部経営学科3年
お笑いサークルに所属しており、
時折何気ない発言で周囲を笑いに
巻き込む。経営学を専攻している
彼は多角的な視点を持ち、活動に
おける様々な場面での確かなアドバ
イスをしてくれた。

自然との共生

並木さんは志望動機でこう語っています。「今日では日本をはじめとし、資本主義的な社会が発展していく中で本来の人間生活のあり方や、文化的側面に対し目を向ける機会が少なくなってしまうように感じられます。そういった点で、この機会を通して現代的な暮らしを見つめ直すことができると考えました」とのことです。並木さんはその志望動機の通り誰よりも現地の自然、文化、社会状況に強く関心を持ち、現地の方に積極的に質問をする姿や、自然と触れ合う姿が印象的でした。

公共事業における政府と現地のせめぎあい

並木さんは公共事業における政府と現地の人々、自然との対立に関して興味を持ち現地では実際に高速道路建設の現場に訪れ、現地の方へのインタビュを行いました。インタビュを通して渡航前に読んでいた記事とのギャップを感じたそうです。特に、高速道路敷設に政府による強行的な土地の取引がされていたことに驚愕したそうです。

気遣いの良さ

並木さんの良さは何といっても周囲の空気をとらえ気遣える部分にあると思います。普段のゼミでは積極的な発言をしたり、議論を推し進めたりする役割を担

っています。それはマレーシアでも発揮され、現地では自分のプロジェクト以外の作業にも積極的に参加し、プロジェクトの遂行に大きく貢献しました。根が真面目な彼ですが、活動中は誰もが厭う鶏の解体に自ら取り組んだり、村での食事は毎回大盛りを平らげたりするなど豪快で思い切りの良い一面も見せてくれました。その思い切りの良さは他のメンバーにも間違いなくいい影響を与えました。

また、現地では大学の文化祭で物品リーダーを務めた経験を活かし、生活するうえで必要なものをリストアップし調達、管理しました。現地での安定した生活は彼のおかげといえるでしょう。

活動を通じた

現地でのインタビュを通して並木さんは次のように感じたそうです。「田んぼの重要性は環境的、文化的に需要であるにもかかわらず、道路を敷設した背景には現地の声を試みない政府の態度が表れていると思う。目先の経済発展だけでは、失ってしまう財産が多すぎると感じる。」

豊かな自然、現地での温かい人々、暮らしなどを実感できた身としてはそれらを守ることが本国の発展につながっていくと切に感じたようです。国際的なことに関心を持っているのですが、今後も更に視野を広めていってほしいと思います。



Provisions Leader

林 杏紗

AZUSA HAYASHI (アズ)

学習院大学文学部心理学科1年
協調性のあるほんわかした女学生のように見えるが、現地女子部屋にゴキブリが発生した際に対処できずに叫び回る3人を笑いながら動画におさめるなど、無慈悲な一面も持つ。笑顔で突拍子もないことを言うので、掴みどころがない。

克服と挑戦

林さんは志望動機をこのように語っています。「自分の殻を破り、新たな挑戦を通じて成長したいという思いから、DISSOLVAに参加したいと考えています。私は自分の意見を持ち、それを言葉で伝えることが苦手で、この克服が大きな課題と感じています。また、新しいことを始めても中途半端に諦めてしまうことが多く、真剣に最後までやり抜く経験を通じて自分を成長させたいと思っています。メンバーになった際には、これまで話に聞いたことしかない自給自足の生活を自分の目で見て、体験することで、新たな知見を得たいと思っています。また、自分の考えをうまく言葉にできない人々が箱庭療法のような手法で表現している様子に興味があり、その体験を通じて新たなコミュニケーション方法を学びたいと考えています。」林さんはDISSOLVA参加前に改めて自分を見つめ直し、具体的な理由を持ってボルネオ島に向かいました。林さんは中高時代にハイキング部に所属しており、DIHIKEより過酷な登山を繰り返してきました。この経験がメンバーを支えることになりました。

笑顔で放たれる弾丸

1年生で先輩ながらも先輩たちと積極的にコミュニケーションを取り、去年から参加していたメンバーともすぐに打ち解けてチームの輪に溶け込みました。見た目はほんわか癒し系の林さんですが、斬新で独特の感性を持っており、その発

言は時々メンバーを驚かせることがあります。

グループ間を繋げる

トレッキングの際、体力の差によってどうしても3つほどのグループに分かれて距離が空いた状態で登山することになります。林さんはハイキング部に所属していたこともあり、過酷な登山を経験しているため他のメンバーに比べて後半も足取りが軽く、持ち物も最低限で臨んでいました。現地のトレッキングで林さんは1番速く進むグループではなく、1番後ろのグループと一緒に登山をしました。1年生でありながら遅れがちなグループの先導に立ち指揮をとることで、グループ間の距離を把握し、チームとしてのトレッキングを引っ張ってくれました。

村での生活の最終ロケ「エンディング」

村に到着すると、日本とは異なる環境に心身ともに疲弊してしまつたと林さんは現地ですぐ日記に綴っています。実際村での活動も積極的というよりはかみんなの一歩後ろで静かに観察していたという印象でした。しかし、村での生活の最終日にこの文章の執筆者（元木）を驚愕させます。お世話になった家の4〜5歳の子供と笑顔で交流していたのです。それまでは家の子供が話しかけてきても苦笑いであったのが最終日にこんなに変化するのかという激変っぷりでした。

マイペースに村に溶け込んでいった林さんは、自分らしく村での生活を吸収し、日本に持ち帰ったのではないのでしょうか。



Photo-essay Leader

籾山 柊平

SUHEI MOMIYAMA (モミ)

学習院大学経済学部経済学科4年
チームの中で唯一社会人経験があり、
最年長の学生。フランスに留学して
いたことがあり、来年からは経営コンサル
タントとして企業を支える。メン
バーと楽しみながらも一歩引く姿勢を
取り、カメラ係として活躍した。

全力のコミットment

籾山さんは志望動機をこのように語っています。「前回の DISSOLVA では反省すべき点が2点あった。1点目は自身が責任を負うプロジェクトがなかった為、全力で何かのプロジェクトに貢献できていなかった点だ。今回はある特定のプロジェクト、もしくは複数のプロジェクトに全力でコミットし、自信を持って「これが成果だ」と言えるような実績を残したいと思っています。大学卒業後は経営コンサルタントになるため、現地渡航前の計画段階では、コンサルタントらしく問題解決をステップごとに分け、各段階での達成目標や期間、リソース配分などを定めた上で問題の解決に全力で挑みたい。反省すべき点の2点目は、写真撮影の構図想定が甘かったことだ。トケコム の執筆に携わるにあたり、一人一人のポートレート写真や、村人と関わる様子の写真が少なく、メンバーの特徴や村人との交流に関する情報を伝えきれいなと感じた。今回の活動ではプロジェクトを推進する立場として参加をしたいと思います。前回の反省を活かし写真係そのもの、もしくはそのアドバイザーとしても参加をしたいと思っています。」籾山さんは自分が就く仕事を踏まえて自分でできることを客観的に分析していま

複数プロジェクトへの貢献

チームの中で唯一社会人経験があり、最年長の籾山さん。大学生として楽しむところは全力で楽しみながら、真面目なところは真面目にというメリハリがメンバーの中で1番利いていたように思えます。渡航前準備ではプロジェクトを行う日程や作業行程などを明確化し、英語翻訳した仕事内容計画書を作成しなければなりません。しかし渡航1ヶ

月前になっても仕事内容計画書は完成せず、焦りはあるもののやる気が出ないという状況になってしまいました。しかし、仕事内容計画書の中で終わっていない部分全てを籾山さんが引き受け、籾山さんが作った仕事内容計画書のレベルの高さからチームの緊張感も徐々に強まり、渡航前にあらためて気を引き締めるきっかけとなりました。

言語を超えないコミュニケーション

籾山さんが担当したプロジェクトの1つに3Dモデリングがあり、自由な表現したり遊んだりすることで心の内面を表現する心理療法です。籾山さんは積極的に英語で質問を行い、完成された作品について村人との会話を楽しみました。「言語を超えて」とはよく言いますが、共通の言語を使用することほど便利なことはありません。TOEIC 900点超えの技能を活かし、他のメンバーが会話に苦しんでもスラスラと説明できる籾山さんは信頼を置かれていました。そんな籾山さんだからこそ、村人とメンバーの自然な写真を撮ることができたのかもしれません。

カメラ係としての役割

籾山さんは片時もカメラを離さず、シャッターチャンスを見逃さないようにしていました。みんなの輪に入りつつも、一歩下がってその様子を記録にするというのは簡単ではありません。なぜか写真にすると楽しそうな様子が伝わらなかつたり、同じ人ばかりを撮ってしまったります。竹あかりの撮影も全て籾山さんが行い、自分が納得いくまで、時間の許す限り取り続けました。籾山さんが挙げた志望動機での反省は、有言実行されたと言えます。



Photo-essay Leader

元木 芙美子

FUMIKO MOTOKI (フミ)

学習院大学文学部史学科1年
DISSOLVAイチ面白く、多彩な才能の持ち主。犬を飼っており、つぶらな瞳で犬と戯れる姿に癒される。

志望動機

春に大学に入学し、今年初参加の元木芙美子さん。「高校で世界史に興味を持って史学科に入りましたが、日本以外の国を知識でしか知らないことに気づきました。そこから外国を体感したいという気持ちが強まり、DISSOLVAへの参加を決めました。」と志望動機に書いてくれました。また、「東京生まれ東京育ちで日本の大都会の人混み・広告・SNSの過剰な情報などに嫌気がさしている部分」もあるようで、「ありもしない将来の不安を無理やり掻き立てられている気」がするそうです。身の回りの狭い世界に閉じこもることなく、外に目を向け、海外へ行くこうと思える決断力、行動力は並大抵ではありません。

「一度日本から出て、日本とは全く違う暮らしを知って自分の価値観を認めて、帰国時に日本の良さを再び実感してみたいです。」と、渡航前からすでに帰国後の自分を見据えており、長期的な視点で物事を考えることの大切さを教えてくれます。

抱腹絶倒

彼女の笑いのセンスには目を見張るものがあります。言葉選びの秀逸さのみならず、そのエピソードも、何度も思い出し笑いをしてしまうような唯一無二の面白さを持つています。エピソードトークをしてもうと、それぞれ一つとっても面白さいっぱいなの二つである言葉選び

とエピソードが組み合わさって相乗効果を生み、話の初めから終わりまで笑い転げること間違いなしです。彼女と話していると、この世にこんなにも面白さの詰まった人間がいるのかと、彼女の発する言葉一つ一つに笑いが込み上げるとともに、そのユーモアのセンスに感嘆せざるを得ません。

才気煥発

笑いのセンスだけでなく、映像技術に精通しており、動画編集やカメラワーク等、様々な才能を持っています。高校で映像研究会に所属していた経験を活かし、今回はカメラ係を務めてくれました。動画編集でも活躍し、高等師範学校へ送るビデオでは、メンバーそれぞれが歌っている動画をスタイリッシュに編集してくれ、見事な仕上がりでした。

普段は朝からスパーでアルバイトに励んでおり、ダンボールに荷物を詰めるのがとても上手です。荷造りの手際もよく、寝泊まりする部屋でも自分の荷物を散らかすことなく、スマートです。

仕事ぶり

現地ではカメラ係としての仕事に励み、積極的にカメラを構えていました。様々な体制でシャッターチャンスを狙う姿は、しながらカメラマンのようで、とてもかっこいいです。写真フォルダーを、メンバーの生き生きした表情で充実させるのに大いに貢献してくれました。



Music Leader

政田幸輝

KOKI MASADA (マコ)

学習院大学経済学部経済学科3年
冷静な観察力と卓越された音楽センスで人々の心を揺り動かすアーティスト。人間観察が趣味で、様々な人の表情を読み取り、人間の持つ感情すべて知っているかのような深い洞察力、共感性を持つ。

Dissoiva にかける思い

彼は、非常に熱心な情熱家であります。そして、それと同時に探求心を持ち合わせており、どんなプロジェクトにも興味を示し、自身の目で見ようという気概が感じられます。渡航前に、彼から、現地では、様々な体験をこの目でみて、感じたい、と述べていました。そういった言葉が示すように、彼は、竹のプロジェクト、歌のプロジェクトなど様々な分野にまたがったプロジェクトに動きました。彼の熱心な心の表れです。

柔軟性と適応力

彼は、様々なプロジェクトを行う際にも、彼の特有な柔軟性と適応力を見せました。竹編みプロジェクトの際にも、手際の良さをみせ、非常にスピーディーに仕上げました。それは、トングゴンという竹の音楽楽器の作成にも表れており、完成した際には、感情の機微を竹の音色に乗せながら即興の歌を披露するなど、非常にクリエイティブな面を見せ、他メンバーを驚かせました。また、現地のコミュニケーションに溶け込み、身振り手ぶりを交えながら、積極的にコミュニケーションを図っていました。

歌と人とのつながり

彼は、ギターを弾きます。日本で培った技術で、現地でも華麗に弾いて、聴く人々を魅了させました。時

どき、笑顔を見せながら、歌とともに人とのつながりを感じるような素晴らしい演奏を成し遂げました。実は、その裏には、彼の地道な努力が隠れていました。渡航前にも、そして、村に到着した際にも、空いた時間でコードを弾いている彼を何度か見ました。そういった地道な努力を積み重ねられるのも彼の魅力といえるでしょう。

体力ある青年

彼は、さらに体力のあるメンバーでもあります。非常に軽快なステップで、山を駆け上がる姿を見ました。トレッキングの際にも、疲れた顔を見せず、また、トレッキングが終わった後にも走り込みを行うほど強靱な肉体を持つ者でもあり、その体力は村での生活でも十分に発揮されていたと思います。特に、竹あかり作成においての竹伐採など、力仕事でも一役買っていたと思われ、俊敏に動く彼の姿は、まるで鳥のようでした。

相互に学び合う姿勢

自身が学びの受け手であるだけでなく、相互に学び合う姿勢が大事であるという事を彼は知っていました。現地の高校に訪れた際にも、積極的に英語でコミュニケーションし、学びを深める姿がうかがえました。現地の習慣や礼儀を尊重し、学ぶ姿勢を持ちながら、文化の違いを理解しようと努めていたと思います。





Work Advisor

福士 響

HIBIKI FUKUSHI (ヒビ)

東京農業大学地域環境科学部森林総合学科2年
大学入学前から、農業インターンをし、渡航前は、奥多摩の山で森林研修をしていた。林業や農業に専門的知識を持っており、彼に聞けばなんでも答えて、やり方を教えてもらえる。

事前に準備をしっかりと

「昨年の参加で新しく様々なことを知ること、体験することが出来た。その中で昨年に追加で確かめたいことやさらに知りたいことがたくさんできた。昨年は現地の状態がよくわからない状態で参加したが、今年は昨年のことを踏まえた参加ができると感じる。昨年は半分は現地でどうにかしようという感じだったが、今年は事前に準備をしっかりとした上で出発したい。田んぼの状況や森林環境の観察をいろいろ試せたらいい」と志望動機を語る福士さんは、大学で学ぶだけではなく実際に現場で確かめることでその学びを深くしたいと考えていました。今回は前年に続きの参加になるため、前回のプロジェクトとして行った高収量の稲作の田んぼの状態の確認や、植樹した樹木の確認、将来の竹の植樹の可能性の模索などをしていきたいと思います。

竹の生育の秘訣を探る

福士さんの自宅では、家屋のすぐ隣に竹林があり、春先には、たくさん竹を収穫できるそうです。見た目に美しい竹林、そして食べておいしい竹ですが、いいことばかりではありません。竹は非常に生育旺盛な植物です。福士さん曰く、草なのか、木なのか、専門家もまだ科学的な分類で完全に一致していないそうですが、大抵イネ科とされる竹は、毎年竹を生み出して、それが3ヶ月ほどで木のような高さまで生育してしまいます。日本の竹は、地下茎を伸ばして、その先で竹が芽を出しますが、どこに出ているか、予測できません。福士さんの自宅では家の床を突き抜け、押し入れの中や畳を押し上げて、生えてくることもあるらしい。

しかも、大量の竹は食べきれず、福士さんはメンマ作りにも挑戦し、でも、漬かりが甘くて腐ってしまったそうです。

発酵や炭化、化学の実験

福士さんは東京農業大学で、農業や林業、森林環境について学んでいます。加えてインターンとして農業実習補助の経験もあり、活動ではアドバイザーとして皆を率いてくれました。発酵食作りでは、メンマ作りで試行錯誤してきたことを活かし、村の方の説明を熱心に聞いて、竹のボソウという漬物を作っていました。また、福士さんは火起こしや整地などが得意であり、今回、初投入した「無煙炭化器」を早速使いこなして、竹炭を作って、花壇に撒いて土質改善をしたり、キッチンの排水溝の下の水たまりに竹炭をネットに入れて設置し、水質改善を行ったりしました。化学的に考えて、自然との付き合い方が上手なため、無人島に連れていったら心強いでしょう。

積極的に挑戦の姿勢

活動中、積極的に知識を吸収しようとする福士さんの姿はとても印象的でした。鶏を生きたまま捌く際にはこともなげに積極的に皆をリードし、壁の漆喰の塗装も持ち前のアート感覚を活かして積極的に行ったりと、自らの専門性を活かし活動に貢献していました。

多才な挑戦とユーモア溢れる行動は、村の雰囲気明るくし、さらに福士さんのアドバイザーとしての存在は皆に安心感を与えていました。来年は、生物文化遺産の家の裏に移植した竹が、どのように成長しているか、確認するのが楽しみです。

Message from Coordinators



多様性の美しさの開眼される

IMELDA TAMBAYANG

イメルダ・タンバヤン
ブアイヤン村出身。マレーシアサバ大学では歴史学を専攻。修士号取得後は、小学校教員として後進の育成に力を注ぎつつ、傍らで歴史研究を続け、ブアイヤン村の歴史を文字にして、残していきたいと願っています。

■ **革新的で影響力のある成果を**

学習院大学のDISSOLVAポルネオプロジェクトに参加する機会をいただいたことに、改めてこの場を借りて感謝の意を表したいと思います。私は2012年当初から、ずっと続けてDISSOLVAの活動に参加してきましたが、今回も、ブアイヤン村での夏季プログラムに参加するという素晴らしい機会に恵まれました。この活動では、マレーシアと日本という2つの異なる国からのボランティアが集い、ユニークな文化と教育の交流が促進されてきたと思います。プログラム全体を通じて、基本的な言語スキルの指導、伝統工芸の実演、それぞれの文化に固有の持続可能性を高める取り組みについて、共に考え、共同活動を進めてきました。自らのアイデアが評価され、革新的な試みが奨励される環境で協力し合えることは、とても刺激的です。お互いの生き方を理解し、多様性の美しさに目を開かされながら、私たちを結ぶ共通の価値観も強く認識することができました。そして、このプログラムの素晴らしい点の1つは、友情です。異なる背景と場所から来ているにもかかわらず、私たちはすぐにつながり、共通の好奇心と熱意によって結びつきました。プログラムではさまざまな活動をしてきましたが、今回私が最も印象に残ったのは竹あかり作



Message from Coordinators



継続的な信頼に意味がある

SABRINA SUKOR

サブリーナ・スコル
ブアイヤン村出身。高校を卒業して、半島のペラ州にあるスルタンイドリス教育大学に進学して、教育学を学んでいます。将来はドゥスン語教育とマレー語教育のできる言語教師になりたいと願っています。

■ **一人一人の献身と努力と**

DISSOLVAメンバーの皆さん、コピサナガン(ドゥスン語で、こんにちは!)ブアイヤン村での1週間のプロジェクトにおいて、皆さんが献身的に振る舞い、努力を惜しまなかったことに心から感謝いたします。短い期間ではありましたが、皆さん一人一人の献身と努力がポジティブな結果をもたらし、皆さんが渡航前から計画していた多くのプロジェクトを成功裏に成し遂げ流石とに繋がりました。また、いつも私を誘い出してくださり、プロジェクトに参加するよう促してくれた、メンバーの皆さんに改めて心から感謝したいと思います。皆さんの継続的な信頼とサポートは、私にとって大きな意味があります。DISSOLVAの夏季プログラムに貢献する機会とプロジェクトから学ぶ機会を与えてくれたことに心から感謝しています。DISSOLVAは私に多くのことを教えてくれました。それはプロジェクトだけではなく、ブアイヤン村の人々、特に若者たちにとって、貴重な知恵と知識の交換と交流をおこなえる場だからです。村人たちと私は、竹あかりが完成したその日、点灯された竹あかりを見て、その美しさに驚きました! 最後になりますが、私も大学に進学したばかりでこれからもっと忙しくなるかもしれませんが、来年のプロジェクトのためにもっと時間を割けるようにと、本当に願っています! ポウシコウ トインサナン(皆さん、ありがとうございます!)



りでした。大変でしたが、非常にやりがいがありました。竹あかりを無事に完成させた瞬間を鮮明に覚えています。達成感とチームワークが強く印象に残ります。

私たちのスキル、アイデア、努力を組み合わせることで、革新的で影響力のある成果につながると信じています。学習院大学の皆さんのサポートに心から感謝します。あなた方のリーダーシップはインスピレーションであり、成長と発展の機会を与えてくれました。チームの成功に向けて、知恵、忍耐、そして献身が大切であることを教えてくださいました。あらゆることに改めて感謝しています。



Message from Coordinators 竹細工で「すごい」の意味を知る

ALLEN DREW TAMBAYANG

アレンドリュー・タンバヤン (アラン) ブアイヤン村出身。DISSOLVA活動の総括責任者であるイメルダさんの弟で、10人兄弟姉妹の下から2番目。16歳。ドンゴンゴンにあるDatu Peter Mojuntin中学校のスポーツ選抜の生徒。将来は竹工芸にも興味がある。

■ 村の自然の美しさを表現して

みなさん、こんにちは。私はアレンドリュー・タンバヤンです。ブアイヤン村出身の中学生です。私は2024年9月にDISSOLVAプログラムに参加した村人の一人でした。友達のアインソンくんも一緒に参加しました。私たちが参加した活動は非常に有意義でしたので、その1週間の経験の思い出は今でも鮮明に残っています。この9月の1週間のブアイヤン村での活動は村人とDISSOLVAチームとのつながりを強めるのに役立ちました。僕自身は、DISSOLVAの学生たちと交流する機会を通じて、「すごい」という新しい日本語を学びました。これは僕たちの言葉では、「Wow」又は「Wow」とか「Bagus」又は「Osonong」(Amazing 素晴らしい)と訳され、プログラム中に現地の若者たちにもよく使われた言葉です。DISSOLVAメンバーと一緒に竹細工に取り組むことは、スリリングで楽しい経験でした。竹を使った工芸には、参加している村の若者や学生たち全員が創造性、忍耐力、手作業のスキル、チームワークが重要です。出来上がった竹細工は、竹を装飾品に変えて、自然の美しさを表現し、生物文化遺産の家(ピオ・ブダヤ)の魅力を高めることができました。なので、私は竹工芸プロジェクトに参加できたことに心から興奮しています。今後も、DISSOLVAやブアイヤン村の村人たちと協力して、このような活動をもっと続けていきたいと心から願っています。



Message from Coordinators 級友たちの記憶に永遠に残る

OLGA TAMBAYANG

オルガ・タンバヤン ブアイヤン村出身。サバ州東北部トゥアランにある教員養成師範学校セントキャンパスで、マレー語教師になる勉強をしています。イメルダさんの妹で、アランくんの姉。小学校の頃からずっとDISSOLVAに参加。

■ 国際プログラムの調整役として

2024年1月に私は勇気を出してDISSOLVAに連絡を取り、私の学ぶ教員養成師範学校の異文化交流プログラムの学習パートナーになることに興味があるか尋ねました。DISSOLVAメンバーの皆さんが私たちからの招待を歓迎してくれて、とても嬉しかったです。私たちはこの異文化交流プログラムの準備に精力的に取り組み、2024年2月23日に無事に実施することができました。私たちはこのプログラムをMalaysia-Japan Virtual Crossroads: Institute of Teacher Education (ITE) Kent Campus and Gakushuin University Cross Cultural Programmeと名付けました。私の友人たちは、Zoomを使用したオンラインプログラムではありませんでしたが、学習院大学の学生さんたちと会って会話することができて大喜びでした。プログラムコーディネーターとして、皆さんが私たちの学習パートナーになることに同意し、招待を受け入れてくれたことに深く感謝しています。当初、私たちのコラボレーションはそこで終わると思っていました。しかし、今度はDISSOLVAメンバーから私に連絡があり、9月のサバ州訪問中にDISSOLVAの現地活動の一環として、私の学校のセントキャンパスを訪問したいという素晴らしい提案をしてくれました。私は興奮で胸がいっぱいになり、この嬉しい知らせを学校の先生たちや仲間の友人たちに伝えました。

2024年9月、先生たちや級友たちは期待に胸を躍

らせ、DISSOLVAの到着が迫っていることに心をときめかせていました。訪問の成功を確実にするために、私は再びコーディネーターの役割を引き受け、最初の立案から最終的な実行まで、綿密な準備を行いました。準備の過程では、学校のプロトコルのために難しいことも多く、多くの調整も必要でした。これは最も重要な国際プログラムの調整であり、すべての先生たちから完璧に実行されることを期待されていました。私たちはこの訪問プログラム Crossing Borders: Academic Visit of Gakushuin University and ITE Kent Campus と銘打ちました。プログラム全体を通して、DISSOLVAメンバーが大いに楽しんでいく様子を見て、私たちの心は計り知れない喜びで満たされました。改めて、セントキャンパス代表として、皆さんのご参加と、先生たちや級友たちの記憶に永遠に残る、非常に有意義な機会を与えてくださったことに、心から感謝いたします。セントキャンパス訪問プログラムの後に、私は幸運にも、DISSOLVAのブアイヤン村へのトレッキングにも同行することができました。時間の制約により、週末に行われたこの1つの活動にしか参加できませんでしたが、皆さんと一緒に過ごす機会に、私の心は喜びでいっぱいになりました。実際、私はずっとブアイヤン村滞在全体を通して、さまざまな活動に参加したいと思っていますが、その期間中は休暇が取れず、授業のために学校に戻らなくてはなりませんでした。

今後また、DISSOLVAが主催するすべての活動に参加する機会があることを心から願っています。

川は世代を超えて 流れ続ける…… 歌って、繋げて



眞嶋 史叙 (学習院大学経済学部教授)
専門はグローバル経済史。先史時代から現代までの経済発展について研究。

DISSOLVA 再生を意識して

海外協力研修ボランティア活動プログラム DISSOLVA ボルネオプロジェクトは、グローバル人材の育成を目的とする学習院大学の国際交流協力特別事業の一環として、多様で持続可能な解決策を模索し続け、今年で発足以来12年目となりました。経済学部眞嶋研究室の学生を中心に、文学部・法学部・理学部・国際社会科学部の学生も参加して、2012年から築きあげられてきたボランティアグループ活動です。2016年度までの5年間、国際交流協力特別事業として活動し、その後2年間は学生団体 DISSOLVA としてミニプログラムを実施、コロナ禍の下ではオンラインで活動し、2023年度から再び国際交流協力特別事業として活動を再開しています。

今年度は、昨年度の復活から2年目で、新たな課題も見えてきたため、9月の大学夏季休暇期間の最後12日間に日程を絞って、マレーシア・サバ州(ボルネオ島)の先住民ドゥスン人居住山村へ現地渡航し、これまで同様に「とけこむ」というチームコンセプトのもと、日本の学生と現地の方がお互いを尊重し合っていて、異文化の違いを超えていく試みが続けました。現地の若者たち主体の環境保護活動を共に

て、村落開発委員会が補助金を得て、伐採業者や重機を導入して進められることが多いです。そのため林道も整備されます。伐採・整地・植栽後は、農村コミュニティの自助努力に任せられ、生産物販売による収入は安定しないものの、数少ない現金収入源として受け入れられてきました。またサバ州政府による大規模なダム開発もパパール川下流で再開する見通しで、新たな舗装道路は水源域保護のための強制移住の可能性も高めています。

このような急速な社会環境の変化の中で、村民自身の意識変革と村民イニシアティブによる持続可能性の追求が重要になってきています。DISSOLVAは若者村落委員会 TOMUYA

Aの組織化を支援し、4つの領域(熱帯雨林の保護、大雨水害予防、不安定雇用の緩和、ジェンダー平等)で共に活動してきました。TOMUYA発足以来、伝統手工芸の振興とその販売ルートの開拓は重要課題です。村民コミュニティ全体で、地球上貴重な熱帯雨林の自然環境保護の担い手としての自覚を持ちつつ、変化化する社会環境下で生活を成り立たせていくための挑戦を続けています。そして、有償であれ無償であれボランティアをする若者や学生の心身の育成と仲間と協働する喜びの体得を一番に大切にしています。

今年度も年間を通じて TOMUYA の現地活動をリモートで応援しつつ、9月には現地活

も果たして、特に竹を用いた伝統手工芸の振興をメインとする複数のプロジェクトを TOMUYA とともに推進しました。また、パパール川と隣接するモヨグ川の下流域にあるクアイ村では、先住民の若者たちの活動拠点でもあるコトスジェイロンに滞在して、先住民文化の指導を受け、若者たちが作詞作曲した「川の唄」を歌って、世代を超えた民族の誇りに心動かされました。ブアイヤン村では以前の活動参加者の多くが、同窓生として戻って応援してくれる場面がありました。このように若者たちに寄り添い、活動を継続していくことで、先住民農山村の未来共創に繋がるのではないかと願っています。



2012年以降、学習院国際交流協力特別事業として実施したり、学生団体として小規模に活動継続したりしてきた



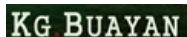
DISSOLVAのOBOG中心にパパール川流域の自然保護活動を支援



2015年の発足以来、コミュニティベースドツーリズムの受入れ組織として活躍するTOMUYA



ブアイヤン村の若者によるパパール川流域の自然保護活動を継続



村長・村落開発委員長を中心に若者委員会の活動に協力し、ホームステイなどインフラ整備

協力



サバ州未来共創NGO



先代の古民家を改修し先住民若者の活動拠点やホームステイを提供



With sincere gratitude

● 編集後記 ●

昨年に引き続き編集を担当しましたが、今回は編集作業の多くを他のメンバーに助けてもらい、私は論文執筆やメンバー紹介の一部を担当しました。3Dモデリングの実施やその後の論文執筆の過程で得られた示唆は深く、今後のプロジェクトの方向性を考える上で重要な学びとなりました。一方で、プロジェクトに集中しすぎるあまり、メンバーそれぞれの特徴や現地での貢献を十分に見つめられなかったことを反省しています。協力してくれた皆さんに心から感謝し、この経験を今後の自分の成長にしっかりと繋げていきたいと思っています。 **報告書リーダー 靱山 柊平**

トケコムの編集を進めていると、現地でホームシックに陥り、村人のカラオケの騒々しさに頭を悩ませ、慣れない環境から逃避するように日記を書きまくった日々が昨日のこのように思い出されました。ブアイヤン村での生活ではボランティアをしているというよりも「体験させていただいている」という気持ちが強かったです。鶏が殺される時に最期の力を振り絞って出した鳴き声は一生涯忘れないと思います。DIS SOLVAの活動は自分が史学科であることも重なり、歴史とは何かを考えさせられるきっかけになりました。ブアイヤン村は今でも自給自足的生活です。対して、都会で仕事を探したり、大学へ行き村を出たいと考えたりする若い村人がいることも事実です。果たして工業社会となった東南アジアは誰にとつての歴史なのか、歴史を複合的視点から捉えることが大切だと気づくことができました。

最後まで読んでいただきありがとうございました。もしこれから報告書を作る予定の人が読んでいたら、期限に間に合うように頑張ってください。大学祭後すぐに執筆に取りかかることを強くオススメします。

報告書リーダー 元木 美美子

今回のプロジェクトで私はミュージックリーダー、カメラ・エッセイ係を努めさせて頂きました。これらの係を通して普段見れないメンバーの意外な一面などを知ることが出来、大変充実した12日間となりました。現地に赴き現地民の温かさに触れる一方、村人と話す中で「大学に行きたくても資金が足りない」と言った話を伺いました。彼らの明るさの裏にはそういった問題も存在するのだ、ということを決して忘れてはいけません。今後も本プロジェクトが私たちと現地の方達の相互に影響を与え合うようなプロジェクトとして継続されることを切に願っております。

ミュージック 兼 報告書リーダー 政田 幸輝

To Be Continued ...

DIS SOLVA ボルネオプロジェクトは 来年はミニプログラムの形で、小規模に実施予定です。

基本データ	
事業名	学習院大学 海外協力研修プログラム DIS SOLVA ボルネオプロジェクト
英語名	DIS SOLVA - Diverse and Sustainable Solution-seeking Voluntary Action
所在地	学習院大学 経済学部 眞嶋史叙研究室内
設立年月日	2011年4月20日

2024年度データ	
チーム名	DIS SOLVA 2024
結成年月日	2024年4月18日
参加学生数	9名(学科別: 経済6名, 経営1名, 史1名, 心理1名) + 学外1名
代表者名	中村仁子(統括リーダー)
活動期間	(現地活動) 2024年9月11日~9月22日(12日間) (学内活動) 2024年4月18日~翌2月26日(活動頻度: 毎週)
活動場所	マレーシア・サバ州・ピナンパン郡・ブアイヤン村 他

学習院大学海外協力研修プログラム DIS SOLVA 2024 ボルネオプロジェクト

English website:
<http://www.cc.gakushuin.ac.jp/20070019/dissolva/src/>

Japanese website:
<https://www.cc.gakushuin.ac.jp/e070019/DISSOLVA/>

Facebook:
<https://www.facebook.com/dissolva>



フォーエバーサバ インスティテュート Forever Sabah Institute

Email: fsinstitute@foreversabah.org
FS website: <https://www.foreversabah.org/>
FSI website: <https://www.foreversabahinstitute.org/>
Padi Projek website: <https://www.projekpadi.org/>



コトス・ジティロン Kotos Jitlon

Facebook: <https://www.facebook.com/NBOWH/>



学習院 院長先生 および 常任理事の先生方

学習院国際交流基金理事の先生方

学習院大学 学長先生 および 各学部 学部長先生方

故 川嶋辰彦先生 (学習院大学名誉教授)

野呂純一先生 (目白大学専任講師・学習院大学非常勤講師)

伊藤由紀子先生 (学習院女子大学教授)

山本博之先生 (京都大学地域研究統合情報センター)

奥田丈二先生 (日比谷トラベルクリニック院長)
DIS SOLVA 参加者に A 型肝炎と破傷風の予防接種を施し、適切なトラベルアドヴァイスをくださいました。

白石克己さん (元 JICA コタキナバル職員)

金子奈央先生 (長崎外国語大学特任講師・元マレーシアサバ大学 (大学院))

大村大輔さん (株式会社大測 森林緑地事業部 アカリノワプロジェクト)
DIS SOLVA 渡航に先駆けて、竹あかりプロジェクトをご指導くださいました。

ポール・ポロドン先生 Dr. Paul Porodong (元マレーシアサバ大学教授)

岩崎美有子さん (ボルネオ雑貨ラヤンラヤン・元マレーシアサバ大学 (大学院))

ハミダ・サムスディン先生 Dr. Hamidah binti Samsudin (ITE Kent Campus)

シンシア・オングさん Cynthia Ong (Forever Sabah ChEF)

ケン・ウィルソンさん Ken Wilson (Forever Sabah)

ノエル・セアナンドウさん Noel Seanundu (Forever Sabah)

ケリー・ジティロンさん Kelly Jitilon (Kotos Jitilon)
ボルネオ滞りの始めにモヨグ川中流域のクアイ村でホームステイ受け入れをし、持ち前の撮影スキルを活かして、多くの素敵な写真をご提供くださいました。

ウィニー・ジミスさん Winnie Jimis (Kotos Jitilon)

フィルザー・ジャム・ジャムさん Filzah Jam Jam (Arkitrek)

マーティン・フォーゲルさん Martin Vogel (Kopel/Mescot)

ロズリ・ジュクラナさん Rosli Jukurana (Kopel/Mescot)

伊藤紗江さん (HIS サステナビリティ事業推進チーム担当者)

アルストンさん (元 HIS コタキナバルガイド)

フォロさん (HIS コタキナバルガイド)